

●前回の講義

演習問題「19世紀末からのイギリス産業衰退の原因を論ぜよ」

- 1 イギリス産業はなぜ衰退したか？
- 2 イギリス製鉄業の成立過程
- 3 製鉄業における産業革命

企業者活動の衰退

産業経営者のジェントリ化

→では、イギリス製造業の衰退を招いた「事業環境」はどのような構造を有していたのか？

●本日のテーマと演習問題

第8講 マーチャント・バンカーの台頭

堀江英一『経済史入門』7章1CD 9章4A 10章1C

大塚久雄『欧州経済史』2章4

演習問題「イギリス資本主義化におけるマーチャント・バンカーの役割を論ぜよ」

- 1 イギリス革命と商人・金融利害
- 2 マーチャント・バンカーの概念と機能
- 3 有力なマーチャント・バンカーと国家財政

【1】イギリス革命と商人・金融利害

1 イギリス革命における長老派

図) イギリス革命におけるセクト

トレヴァー・ローパーのトーニー批判：①独立派の台頭と②ロンドン商人の保守化・貴族への接近をどう説明するのか？（浜林正夫『ジェントリの勃興』へのあとがき）

「レヴェラーズが独立派の急進主義の原理を徹底的におしすすめんとする決意を示すや否や、クロムウェルとかれの同僚の将軍たちはただちに軌道からそれて長老派の商人層と同

盟してしまった」(『レヴェラーズとイギリス革命』25頁)

1688年革命→プロテスタントの銀行家・投資家の台頭

1690年代から:「金融革命」

- ・ イングランド銀行創立
- ・ 国債の創設
- ・ 1697年貨幣改鋳→事実上の(de facto)金本位制
- ・ 抵当証券市場の拡大
- ・ 為替手形使用の増大
- ・ 株式取引所の興隆(『ジェントルマン資本主義Ⅰ』50頁)

2 土地利害と金融利害の融合

「1688年革命を行った地主階級の財産と、革命を財政的に支えたマーチャント・バンカーの財産は、国益の決定においても、個人的金融の面においてもますます結びつきを強めていった」(『ジェントルマン資本主義Ⅰ』46頁)

婚姻を通じた貴族と金融業者の結合

3 アムステルダムからロンドンへの金融中心地の移動

オランダ ナポレオン戦争期フランスと連携→敗北
→インド属領および艦船の大部分を失う。

1796年 アムステルダム銀行倒産

- ・ 有力な商人や金融業者はドイツ・オランダ・デンマークからロンドンへ進出
- ・ 本国の家族と密接な連携→国際的な手形引受業務へ進出

【2】マーチャント・バンカーの概念と機能

1 マーチャント(merchant)業務

●企業家とマーチャント

製陶業者ジョシア・ウェッジウッド(Josiah Wedgwood)とトーマス・ベントレー(Thomas Bentley)

ベントレー:初期の外国注文をハンブルグ・マーチャントとそれらの内国取引関係から見つけた。→グラマー・アンド・ライト(Grammer & Wright)「あなたが送るどの商品であれ、アムステルダムの著名商社によって、対価は12ヶ月の通常の信用で引き受けられるであろう」(『興隆』10頁)

・マーチャントは特殊の商品の交易に専門化（リスクを有する）

↓（銀行業務へ）

リカードウ「銀行家独特の機能は、彼が他人の資金を使用するや否やはじまる」（『ロンバード街』31頁）

2 手形引受業務(acceptance business)

手形引受→時間と距離のリスクを手形引受商社が担い、コミッションを得る。

- ・ 輸出業者：商品が発送されるやいなや現金を獲得可能
- ・ 輸入業者：商品が確実に手許に到達するまで、あるいはそれを再販売するまで支払いを延期することが可能（布目『マーチャント・バンキング』22頁）

・銀行による手形引受の形で商業へ短期信用を与える。商人機能→銀行機能

「輸入業者が三ヶ月ないし六ヶ月為替手形(bill of exchange)すなわち顧客からの支払いがなされる時に満期になる手形を、その引受商社(accepting house)宛に振り出すことである。当該引受商社は手形を受け取り、それを満期まで保有するかもしれないし、または手形割引の取引を行うそれを割引くかもしれない」（『興隆』3頁）

・ マーチャント・バンカーは財務諸表を公開せず、相互評価（A1-A4）

「企業の地位は、その手形が売却され割引かれるときの金額によって、容易に確認できたのである。すなわち、割引の金額が小さければ小さいほど、その商社の地位は高いのである」（『興隆』133頁）

●有力マーチャントの手形引受業務への特化

・「外国との取引を希望しながらも、資金の乏しい商人はコミッションを払って、外国との取引関係を有する大商人に自己の手形を引き受けてもらったのである。大商人は、この引受コミッションの収入が本来の商売よりも大きいところから、しだいに本業をやめて引受業務を行うにいたった」（布目『マーチャント・バンキング』21頁）

3 発行業務(issue business)

- ・ 短期債の発行により財政上の信用を準備
- ・ 外国産業ないし外国政府のための長期借款の発行（高い収益とデフォルトのリスク）
- ・ 中小のマーチャント・バンカーは、大手業者からまわってくる発行証券を小売りして、収入の多くを稼ぐ。（『興隆』156頁）

1818年 プロシア債—ロスチャイルド商会とベアリング商会

【3】有力なマーチャント・バンカーと国家財政

1 ベアリング商会

- ・ オランダ起源
- ・ ゼネラル・マーチャント業務を継続

2 ロスチャイルド商会

- ・ フランクフルトのコイン商出身

ブラウン商会・モルガン商会はアメリカへ進出→「投資銀行」へ

3 マーチャント・バンカーと政府

戦費調達に伴う国債発行を通じて政府との関係強化

「イングランド銀行は政府とシティとの間の公的な調整機関であったが、マーチャント・バンカーと銀行家との非公式な関係を強化しており、その理事会には大金融商会の多くが代表を送り込むことができた」『ジェントルマン資本主義Ⅰ』86頁)

● 小括と今後の課題

- ① イギリスにおけるシティの位置
「ロンドン＝マンチェスター枢軸」？
- ② ロンドンを中心とした国際的多角決済システムの構造

● 第3部 イギリス資本主義の特質

第9講 6月11日 (1) 穀物法と自由貿易体制
『経済史入門』8章1 『欧州経済史』2章4
演習問題「穀物法をめぐるマルサスとリカードウの論争を論じなさい」

第10講 6月25日 (2) 「財政＝軍事国家」の登場
『経済史入門』7章2-4 『欧州経済史』3章

第11講 7月2日 (3) 救貧法と中産階級・労働者階級
『経済史入門』8章2・3 10章3 『欧州経済史』「資本主義社会の形成」

第12講 7月9日 (4) ボーア戦争と大英帝国
『経済史入門』11章2

【参考文献】

- ホロレンショー『レヴェラーズとイギリス革命』（未来社、1964年）
梶枝嗣朗『近代初期イギリス金融革命』（ミネルヴァ書房、2004年）
布目真生『マーチャント・バンキング』（金融財政事情研究会、1976年）
バジヨット『ロンバート街』（岩波文庫、1941年）
キャメロン『産業革命と銀行業』（日本評論社、1973年）
チャップマン『マーチャント・バンキングの興隆』（有斐閣選書R、1987年）
Stanley Chapman, *Merchant Enterprise in Britain* (Cambridge, 1992).
今井清孝『マーチャント・バンカーズ（上下）』（東京布井出版、1979年）
ウェッシュバーグ『マーチャント・バンカーの内幕』（日本経済新聞社、1970年）
Michael Collins, *Banks and industrial finance in Britain, 1800-1939* (Cambridge, 1991).
加瀬正一『シティとイギリス』（至誠堂、1969年）
クラーク『シティと世界経済』（東洋経済新報社、1975年）
神武庸四郎『銀行と帝国』（青木書店、1992年）
井上巽『金融と帝国』（名古屋大学出版会、1995年）
生川栄治『イギリス金融資本の成立』（有斐閣、1965年）

【ノンフィクション】

- デレク・ウィルソン『ロスチャイルド 富と権力の物語（上下）』（新潮文庫、1995年）
フレデリック・モートン『ロスチャイルド王国』（新潮選書、1975年）
ロン・チャーナウ『ウォーバーグ ユダヤ財閥の興亡（上下）』（日本経済新聞社、1998年）
ロン・チャーナウ『モルガン家 金融帝国の盛衰（上下）』（日本経済新聞社、1993年）
広瀬隆『赤い楯 ロスチャイルドの謎（1～4）』（集英社文庫、1996年）
小林章夫『ロンドン・シティ物語』（東洋経済新報社、2000年）